

武蔵野日曜聖書講筵 復活節祈禱会

霊肉一如

――コリント前書15章35～58節――

1984年4月22日

小池辰雄

霊肉渾然「血氣の体」と「霊の体」 自分を問題にしない世界 もう霊の体に甦っている 即身即主 新次元の人

【コリント前15】

35 されど人あるいは言わん、死人いかにして甦えるべきか、如何なる体を
もて来るべきかと。36 愚なる者よ、なんじの播く所のもの先ず死なずば生きず。
37 又その播く所のものは後に成るべき体を播くにあらず、麦にても他の穀に
ても、ただ種粒のみ。38 然るに神は御意に随いて之に体を予え、おのおのの
種にその体を予えたもう。39 凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉あり、獸
の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり。40 天上の体あり、地上の体あり、され
ど天上の物の光榮は地上の物と異なり。41 日の光榮あり、月の光榮あり、星
の光榮あり、此の星は彼の星と光榮を異にす。42 死人の復活もまた斯くのこ
とし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、43 卑しき物にて播
かれ、光榮あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦え
らせられ、44 血氣の体にて播かれ、霊の体に甦えらせられん。血氣の体ある
如く、また霊の体あり。45 録して、始の人アダムは、活ける者となれるとあ
るが如し。而して終のアダムは、生命を与うる霊となれり。46 霊のものは前
にあらず、反つて血氣のもの前にありて霊のものの後にあり。47 第一の人は地
より出でて土に属し、第二の人は天より出でたる者なり。48 この土に属する
者に、すべて土に属する者は似、この天に属する者に、すべて天に属する者
は似るなり。49 我ら土に属する者の形を有てることく、天に属する者の形を
も有つべし。50 兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、
朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。51 視よ、われ汝らに奥義を告げん、
我らは悉とく眠るにはあらず、52 終のラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化
せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。53 そは此
の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。
54 此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著ん



とき『死は勝に吞まれたり』と録されたる言は成就すべし。55『死よ、なんじの勝は何処にかある。死よ、なんじの刺は何処にかある』56死の刺は罪なり、罪の力は律法なり。57されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を与えたもう。58然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、常に励みて主の事を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知ればなり。

●霊肉渾然

コリント前書15章の35節から。

35されど人あるいは言わん、死人いかにして甦えるべきか、如何なる体をもて来るべきかと。

死んだ者がどのようにして甦るか。また、どんなからだをもってくるのかと。大変な疑問です。ところがパウロが、

36愚なる者よ、なんじの播く所のもの先ず死なずば生きず。37又その播く所のものは後に成るべき体を播くにあらず、麦にても他の穀にても、ただ種粒のみ。38然るに神は御意に随いて之に体を予え、おのおのの種にその体を予えたもう。39凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉あり、獣の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり。40天上の体あり、地上の体あり、されど天上の物の光栄は地上の物と異なり。41日の光栄あり、月の光栄あり、星の光栄あり、此の星は彼の星と光栄を異にす。42死人の復活もまた斯くのごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、43卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦えらせられ、44血気の体にて播かれ、霊の体に甦えらせられん。血気の体ある如く、また霊の体あり。45録して、始の人アダムは、活ける者となれるとあるが如し。而して終のアダムは、生命を与うる霊となれり。

これは創世記2章7節の言葉です〔「7エホバ神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入たまえり人即ち生靈となりぬ」〕。

46霊のものは前にあらず、反つて血気のもの前にありて霊のものの後にあり。47第一の人は地より出でて土に属し、第二の人は天より出でたる者なり。48この土に属する者に、すべて土に属する者は似、この天に属する者に、すべて天に属する者は似るなり。49我ら土に属する者の形を有てることく、天に属する者の形をも有つべし。50兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。51視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉とく眠るにはあらず、52終のラッパの鳴らん時みな



忽ち瞬間に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。⁵³そは此の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。⁵⁴此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき『死は勝に呑まれたり』と録されたる言は成就すべし。⁵⁵『死よ、なんじの勝は何処にかある。死よ、なんじの刺は何処にかある』⁵⁶死の刺は罪なり、罪の力は律法なり。⁵⁷されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を与えたもう。⁵⁸然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺ぐことなく、常に励みて主の事を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知らばなり。

まあ素晴らしいところですね。パウロの言葉の中にはもちろん比喻がありますから、比喻は比喻としての見方をしないと間違えますけれども。いわゆる自然科学的な読み方ではダメです。

キリストという、イエスというひとは、マリヤと聖霊（プニューマ）から出来上がっている。これ「マリヤ」は「肉」（サルクス）、こつち「聖霊」は「霊」。そして、キリストはプニューマが中心になっている。

我々も、生まれつきのプニューマが、霊があるんです。

「霊、魂、心、体」

「プニューマ [pneuma]、プシケー [psyche]、カルディヤ [cardia]、ソーマ [soma]」

パウロの書簡を見ると、大体こんな構造になっている。英語やドイツ語でいうと、

霊はスピリッツ [spirit]、ガイスト [Geist]。

魂はソウル [soul]、ゼーレ [Seele]。

心はハート [heart]、ヘルツ [Herz]。

体はライフ [life]、ライプ [Leib]。

我々の生まれつきの人間というのは、これ全体がサルクス [sarx] なんです。この全体が肉なんです。キリストはこの「霊」とマリヤから来ているこの「肉」――私が

「霊肉渾然」

と書いたのはそのことなんです――キリストという霊止は地上にあつて、霊肉渾然としてゐる。渾然一如です。けれども、キリストはやはり、キリストといえどもただ手放しで安閑としていらつしやつたのではない。

ところが、この「肉」という言葉は、自己中心のときは、これは「罪」なんです、この存在はどんなに霊的であろうとも。神さまとの繋がりが無いときには、これは罪なんです、神さまから離れている。いわんや、背いていたらなおさら罪です。

自由意志、自由であるという。自由につくられている。これは物体ではないから。人格体というのは自由につくられている。しかし、この自由を間違つて使ったから「罪となる」。



この自由は、神の本願を自ら受けとる、そういう自由を有っていた。即ち、これ〔霊〕に従う、従順であるという、御意に従うという、御意に「はい」といつて受けとる。それが自由の本当の使い方だったんだけど、そっち〔霊〕をいい加減にして、勝手にその自由を、これ〔肉〕が中心になって、自己中心になったところが、これが「罪」という。「罪びと」です。

●「血気の体」と「霊の体」

ゲーテの『ファウスト』の中に、

「自分の中に二つのゼーレがあつて、

この『ファウスト』も、ゲーテは別なところから引用してあの言葉を使つたんですが、

二つの魂があつて、一つは天に向かつて非常に向上心がある。もう一つはいわゆる肉
的な地上の欲望にかられようととして、これらが戦っている」

と言っている。それは相対的な世界ではそういう戦いがもちろんあります。我々も体験してきている。しかし、この戦いは、この霊肉の戦いは実は、これでは解決がこない。この全体が、中心が己だから。

このことは私はあの「終末的実存者」に書きました。

〔註…著作集第3巻『無の神学』／第二部 無の神学への道／第三章の「碎けの神学基礎論」の原型は「終末的実存者」と題して、1948年10月1日、藤井武先生の第18周年記念講演会で語ったものである〕

どんなにそれが理想主義的、浪漫主義的なものであっても、自己中心であるのはそれは肉である。罪である。自由意志は、実はこの角度のことでもって自由意志とやっているから、その自由は本当は不自由なんだ。これはルッターがエルスムスに対して、そんな自由に対して、

「そつではない。全体が奴隷意志になるときに初めて自由になるんだ」

ということをルッターが言つたのが『クリスチャンの自由』です。

今度の『聖書の人ルター』〔著作集第7巻、1984年2月刊〕の「親鸞とルッター」という項に書きましたから、よく読んでください。

ところが、キリストは、

「わが意志にあらず、汝の意志を」

といって、徹底的に神さまの意志で、自分は僕であるという、これがキリストのプニーマの姿なんです。キリストの霊は完全に神さまに従っている。こつちの霊ではない。こつち

「血気の体」

なんです。

ところが、キリストは血気の体をいただきながら、実はもう



「霊の体」

の現実を展開している。この肉をもう霊化しつつあるんです、キリストは。だから、変貌でもってあんなに輝いたりする。復活というのは、それが顕然として現れただけのはなしです。地上においても彼の言うことを為すことは全部、終末の天界の現実を現じていた。イザヤ書35章で預言していることは、キリストは地上でやっていた。だから凄いですよ、キリストという霊止は。「甦り」なんていうけれども、実はもうちゃんと地上でもって甦りの現実をやっているんです。ええ。何も新しく「甦り」なんて言わなくなつて。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言ったんだ、キリストは。こういうのは、「ソーマ・プニューマテコス」ときつきパウロが言っている「霊の体」という現実です。

「人新たに生まれずば」

という。私たちが新しく、己が死んで、その種が破れて、そして新しい上からの種、天界の種、聖霊を、このプニューマのところを受けて――上からのプニューマを、「プニューマ・ハギオン」という聖霊を受けて――このプニューマが変質しなければダメです。

「生まれつきの霊あり」

とパウロがコリント前書の始めの方で言っている。これがこつちの方なんです。それに対して新しい聖霊を受けると、初めてこれが

「新たに生まれた」

ということになる。だいたいこのキリストに近くなる。近くなつても、これは我々自身はやはり自己中心の「罪びと」であるという二重構造になっている。

けれども、新しくキリストの霊が来ましたから、「プニューマ・クリステイ」が、キリストの霊が来てますから、これが本当に、

「自分は確かに新しくなりました」

と言えるわけです。「血気の体」にあつて、「霊の体」がここに形成しつつある。だから、これがやがて天界に行く時には、

「キリストの姿に化するなり」

ということになってくる。

そのように受けとる前提となるのが、この聖霊を受けとる前提となるのが、この十字架の贖罪なんです。十字架の贖罪を本当に受けとれば、こここのところの我々の中心「霊」が空っぽになるから、そこに聖霊が入ってくる。だから、

「キリストは聖霊をもつてバプテスマする人だ」

と、洗礼のヨハネが言つたとおり、

「私は水で悔改めのバプテスマをするが、ただ方向転換〔悔改〕くらいのことではないんだ」



と。質的転換が始まる。質が変質する。変質変貌する。聖霊に満ちてくると、
「何だか知らないけれども、あの人は光っているなあ。何だか知らないけれども、
明るくなっている」

ということになる。目の輝きがちがってくる。そういうわけで、

「信仰、信仰」

なんていって、力んでいたってダメなんですよ、楽に受けとっていかなくては。

「祈りの世界で受けとることが大事だよ」

と言っているのはそのことなんだ。

「本願を受けとれ」

というのがそのことなんだ。キリストの

「汝の御意を〔成させ給え〕」

というのは、本願を受けとると同時に聖霊が臨んでくるから。その構造がわかってくると、
このパウロの言っていることがよく読めてくる。

●自分を問題にしない世界

42 死人の復活もまた斯くのごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦え

らせられ、

これは「朽つる物」なんだ。もともとこれは、「朽つる物」にて播かれた。

「朽ちぬものに甦えらせられる」

のは、このP「プニューマ」が来るから、天上のPが。Pの2「朽ちぬもの」とでも言おうか
ね、これ「朽つるもの」がPの1なら。Pの2がやって来るから。

キリストが、

「人新たに生まれずば、神の国に入ることができない」

と言ったのは、

「新たに生まれる」

とはこのことだ。

P「プニューマ」を受けなければ、神の国に入ることができない」

ということですよ。

「自分に死ぬ」

ということとは、

「こんなものは問題にしない」

ということですよ。

「さて、大死一番とはどんなことをやるのか」

と、「大死一番だ」なんて力んだってしょうがないですよ。



「自分なんていうものがもはや問題にならん」

ということが、「死んでいる」ことなんです。

だから、自分を問題にしない世界は

「無」

だという。無と死とは同じことですよ。ただ「死」という言葉は、概念上の死という言葉が、何というかね――聖書はそういう言い方をしているから、それでいいんだけど――もつとはつきりいうと、

「自分というものが無い」

ということ。「無私の我」なんだ。我の無き私、我無き我というもの。これは、「我なき我」の我がもう

「聖霊の我」

です。だから、

「その聖霊の我を、我なき我を見よ」

ということになる、もし言うなら。「我なき我を見よ」ということ。それは皆さんが御霊の世界からその権威を有っているわけです。

それは光栄あるものです。光栄、光をもっている。

「汝らは世の光なり」

というのはこのことです。聖霊が来ないで、「汝らは世の光である」なんて言われたって、光じゃないですよ、そんなのは。

「わが霊を受ければ、汝らは地の光なり。地の塩なり」

と。「地の光、地の塩」とかクリスチャンはよく言うけれども、これは御霊を受けなければ、地の塩でも地の光でもない。「信仰」で力んでいて、信仰的、英雄みたいな顔して、くたびれてしまうよ、そんなことをしたら。ところが、無教会の信仰がそれなんだよ。

あのブルンナーが、

「無教会は信仰的英雄である」

なんていうことを言うから、私はブルンナーに言っただけなんだ。

「あなたは無教会をかいかぶりすぎている。聖霊が本当は来てないんだ」

と、はつきり言っただけだ。ブルンナーさんが、

「あなたたちと講演する」

と言った。それで不思議なことになった。塚本先生が私の話を聞いて、正直驚いたんですよ。私に便りをくださったけれども、いつかと言ったかも知れないが、

「僕の伝道はまちがっていた。研究にいきすぎた。手島君と君のが本当なんだよ、しっかりやってくれ」

と、はつきり言いましたよ、塚本先生は私に。そんなことを無教会で言っただけでしょうが



ないからね「言わないけれども」。それは、

「私たちが本当に御霊のバプテスマを受けたから確かに違う」

ということを塚本先生はわかるんだよ、感の好いひとだから。藤井先生も生きていらつしやつたら「同じくそう言うにちがいない」。藤井先生のグループはみんな私をアウトサイダーにした。ああ結構です。こないだ、公演会に行つてわかつたでしょ、なるほど違うと。

「小池先生が無教会の悪口を言つたけれども、なるほどちがうんだ、次元がちがうんだ。無教会の人の話を聞くと眠くなつた」

と誰かが言つていた。冗談じゃないよね。これは福音に対する偽福音だよ――まあ偽にせと言つたら悪いかも知れないけれども――要するに観念なんです。

●もう霊の体に甦っている

⁴³卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、

強きものに甦えらせられ、

私たちはこの御霊を戴いて、

「光栄あるもの」「強きもの」

に甦らされているんです、全部、既に。既に甦らされているんですよ。我々はもう復活体なんです。霊体を、霊核を、霊の核を内側にいただいているから。霊核、体が来ているんだ。この霊肉、渾然、ということ。法然が正に地上でもつて霊肉渾然のところを、あの真言宗はやっているわけだ。

「地上で本当にその境地に、即身即仏にいかないでどこに救いがあるか」

というようなことを言っている。

「ただ来世をあこがれているのではない。地上でその現実に入れ」

と。仏教の世界には、凄いキリストの十字架と復活がないから、これは大変だけれども。大変だよな、あのお経は。そこがキリストは事実を、彼の現実をもつて私たちに

「これ全部をお前にやる」

という。

「この地上の実存も、十字架の贖いも、復活の生命も、聖霊も、無条件にみんなやる」

という。こんな有り難いことはないではないですか。それを

「何のかんの」

と理屈をつけて、観念化したり、遠慮したり、冗談じゃないよ。もう本当ですよ、何も考へることはない。全存在をぶちまけてください。もの凄いことになるから。

「もう霊の体に甦っているよ」

と、私ならパウロの言葉をそれくらいに訳したいところです。まだパウロは少し説明的だけれども。



45^{しる}録して、始^{はじめ}の人アダムは、活ける者となれるとあるが如し。

「始の人アダムは、活ける者となった」というのは、神の――あの場合には、プニューマという、ルーアツハ〔霊〕という字が使つてない。ネフェシュ〔魂〕という字が使つてある――生ける霊となつた。「活ける者」というのは「生霊」、生ける霊と書いてある。この訳はいい。まあ本当は「生魂」なんです。「ネフェシュ」という字は「霊」と訳しては本当はうまくないんだ。

而して終のアダムは、

キリストは、

生命を与うる霊となれり。

永遠の生命を、霊生を、霊の生命を与える霊である。この霊生は、

「神は愛なり」

という、愛という霊生です。質は愛です。愛なき霊生なんてものはありはしない。「永遠の生命」といったつて、ただ時間的な永遠ではない。質が不滅の愛だから永遠なんです。愛とは、いつも申し上げておおり、人を助ける心であり、助ける行為です。それが愛だから。人を救うこと。敵をも救い上げてしまう。だから、

「敵を愛せよ」

という。

「敵を愛せよなんて、これは難しいな」

と思つたら、難しくはない。キリストの聖霊がくると、敵をも荷い上げてしまう。自分を呪う者のために本当に祈り返してやる――呪い返すのではないよ――祈り返して助けてやる。呪うとか、妬むとか、憎むとか、羨むとか、そういうマイナスの徳目がズラズラ並んでいる。ああいうのはみなサタンの方ですからね、全部。サタンの心の動きはそういう暗黒の動きをする。よくクリスチャンでそんなことを言っているのがある。冗談じゃないよ。自分がダメになっていくから。だから、さつき言つたでしょ、

「魂の世界はゴマカシがききませんよ。何とでも言つてなさい。お気の毒でござい
ます」

と。相手がどんなにしても、相手が気の毒になる。亡びに向かつているから。自分たちが行き詰まってしまうから。

そうして、この愛は相手を引っくり返す、変化させる。この聖霊を与えるようになる。それだけの愛を受けながら、なおそれを拒んでいたら、これはもう亡びるより仕方がない。審くのは自ら審いている。こつちが審くのも何でもない。そういうことになる。だから、本当に、何といふかね、楽でありがたくて力がきて困るよな。ああ。そうして楽しくてね。

天下無敵というのはそのことなんです。「インビンシブル・アーマー」[Invincible Armada、無敵艦隊]という。負けないんだ。「インビンシブル」[無敵の]という素晴らしい



ブランドーがあるんだよな。……

我々は「インビンシブル」なんです。あのスペインは負けたけれどもね。この聖霊の世界は、「インビンシブル・アーマーダ」、負けないものをもっている。

「愛は一切に勝つ」

というのがそのことです。相手を倒すのではない。救い上げる勝利ですから。

「呪う者のために逆に祈ってやれ」

とパウロが言ったでしょ。パウロは本当に聖霊の器だから。

「迫害する者のために祈れ」

と。日本の昔のカトリックの殉教者はそういう境地をもっていた。素晴らしいね、本当に。あの殉教者のああいいうところの歴史を見ると本当に頭が下がりますよ。遠藤周作の『沈黙』という小説に出てくるね。

●即身即主

これが霊の体、聖霊の器。霊肉渾然たる境地です。法然が

「地上でもって達しろ」

というが、我々は達し得るんです。それは絶対恩寵の世界に入ると、その世界に入っている。

『無の神学』〔著作集第3巻、1981年刊〕の終わりの方に「即身即主」と書いたでしょ。あそここのところは本当は第三部にすればよかった。「無の神学への道」というところは、実は終わりの方の三つ四つはもう聖霊の世界の話だったから、ちよつと分類の仕方をまちがえた。即身即主というのはその世界です。

使徒たちはみなその即身即主の世界に歩いていたから、使徒行伝のあのような姿なんです。正に霊体をもつて動いていたような姿。これは死んでも死なないです、もう死を乗り越えている世界です。焼かれようが何しようが、一向に差し支えない。

まあ私は80歳になってやっとこの境地ですけれども、あなた方はまだ若いんだから、遠慮なくどんどん入ってください。たださつき、

「聞いたからもう達したなんて思うと大間違いである」

と、原君が言っただけけれども。それは誰でもが、私の証言を今度は自分で体験し体現するまでは本ものにならない。それはお釈迦さんが言っただとおり、

「八万四千の法を説いたけれども、一つも説かなかった」

と言ったのは、

「お前たちが本当にその法の世界に入るまではダメなんだよ」

という言い方ですからね。しかし、もう全身で受けとっている人はグングン進みますよ。

「あとなる者はそきに」

というわけで。私なんかしんがりにして、ドンドン進んでください。私は殿しんがりになるから。



もう入学試験なんてのは、入学試験の及落なんてものには超越しなければダメです。

あのね、あの巨人はダメだよ、負けてばかりしている。あれは、私は福音を説いてやりたいね。そうしたらもう本当に素晴らしい巨人になる。ちっとも巨人ではないよ、あれではみんな気持は割合にいい男なんだけれども、迫力が、天来の迫力を持たないから。いい球がきたら必ず打てばいい。それを待っているんだな。今度は待っているうちに変な球を打たなければならなくなる。見ているとそうだよ。私は、あの王というのは監督としてどうかと思う。あの素晴らしいバッティングの人ですから、もう少し大胆に言ってみようか。けれども、連敗しているけれども、

「何をか！」

といってこれから立ち上がれば勝つよ。立ち上がらないで、どうだこうだただ打ち方の研究をしたってダメだよ。またピッチャーがなつちよらん。見ていて、もう齒がゆくなる。信雄が乗っていたタクシーの運転手が巨人の負けたのを一人で憤慨して、

「ヘタすると他の自動車にぶつけやしないか」

なんて言っていたけれどもね（笑）。私も野球が好きだから。全部を見ていたら時間がかかってしょうがないから、大事なところだけ見る。話がどこかへ行ってしまったな（笑）。

●新次元の人

⁴⁵録して、^{はじめ}始の人アダムは、活ける者となれるとあるが如し。而して終の^{おわり}ア

ダムは、^{いのち}生命を与うる霊となれり。⁴⁶霊のものは前^{さき}にあらず、反って血氣の

もの前にありて霊の^{のち}もの後にあり。⁴⁷第一の人は地より出でて土に属し、第

二の人は天より出^いでたる者なり。

私たちは「第二の人」なんです。「第三の人」なんてのもあるけれどもね。御霊のバプテスマを受けた人たちは――信仰が第二だったら、御霊は第三になるが、まあいいよ、パウロが「第二の人」と言っているから――第二の人だ。キリストは

「第二のadam」「終のadam」

だからね。だから、のちの人、別次元の人間、新次元のひと。我々は新^い次元^いの人です。

そして終にはキリストの姿に化するんだから。

⁵⁰兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を^つ嗣ぐこと能^{あた}わず、朽つるものは

朽ちぬものを^つ嗣ぐことなし。

「血肉は神の国を嗣ぐこと能わず」という。自己中心の世界を「肉」という。それは神の国を嗣ぐことはできない。だけれども、霊体を持ったところの霊肉渾然たる世界は、我々の救いはそういう霊体をもった肉の世界です。

まあいづれ凄^いい天国^い篇^いを私は書きますけれども。

ゲーテの『ファウスト』の中に「天使のコーラス」というところがある。



「キリストは亡びの懷の中から復活しました。

この地上の肉の絆きずなから喜んでお前たちは自分を引き裂け。

行為をもって、活動をもって、彼キリストを誉め称える者

キリストの愛を証する者

兄弟の如くに困っている人に食物を与えてやる者

伝道しながら旅をする人、歛くわびを約束する者

そういう人たちにキリストという師匠は近づいている。

お前たちに彼はそこに居給うのである。」

と。マタイ伝の18章の20節、

「二、三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり」

を引用したような言葉です。素晴らしい句ですね。そういうキリストと共に、この牧人、旅人と共に、我々は第二の人類として、新次元の人として進んで行く。もはや問題はないです。

「自分がどうだこうだ、環境がどうだこうだ、運命がどうだこうだ」

なんて、全部乗り越えてください。あるがままにして乗り越えるんですよ。あるがままにして乗り越えるという世界です。それを変えていくのではない。それはそのうちが変わることがあるでしょう。また、変わらないこともあるでしょう。どっちだっていいんだよ、変わろうが変わるまいが。内側からして既に内的に乗り越えている。内的超越ですよ。この内的超越をして行かないとね。

「一切の秘訣を得たり」

というのはそういうことなんです。そして、いろんなことに遇えばあうほど、逆比例して力が出てくる。いいですか。

巨人も負ければ負けるほど強くなければダメなんだ。巨人は何しているか（笑）。では、終わります。

